第２章　学部組織の整備（昭和30年代）

第１節　教育体制の展開

１　義務教育教員の計画養成学部としての展開

本学部は、主として富山県下における義務教育教員の計画養成を目標として出発したが、発足時より正式には他学部のような学科を置かなかった。学生は、４年制の第１初等教育科と第１中等教育科、２年制の第２初等教育科と第２中等教育科として組織された「課程制」であったことは先にも触れた通りである。

とりわけ、昭和30年代までの「２年制課程」の設置は、戦後の教員需要を充足するため大量の教員を必要とした、という事情に尽きるだろう。殊に、新しく発足した「新制中学校」の教員不足は顕著であった。これらに対応するため、本学部でも短期間のうちに大量の教員を養成できる２年制課程を設置したのである。『富山大学十五年史』(昭和39年）では、

> ２年課程はもとより暫定的なもので、やがては４年課程に切り替えることを予定されていたものであったが、２年制としては極めて充実した内容を具備し、婚期の早い上、女子短大が無かった本県の特殊事情も手伝って、成績の良い良家の子女が競い集まった。採用側にも２年課程修了生を歓迎する向きがあって、その存置が県民から要望せられた。しかし教育学部は県下教員の学力増強の方針に基づいて、あえて２年課程の定員を削減し、（略）35年３月の第10回修了生13名を最後として２年課程は完全に姿を消した。

と記している。

また、同じ理由によって、正規の免許状を有しない現職教員の再教育に努め、昭和25（1950）年９月より、修業年限１カ年の「小学校教員臨時養成所」を特設した。同じく25年９月には、「通信教育部」が認可開設された。受講期間は４カ月とされ、「昭和25年度の第１期より33年度まで通算29期間、幼・小・中学校の現職教員を対象に、開設科目は教職専門科目30科目、一般教育８科目の計33科目を開講し、受講者延べ8,766名に達した。」（『富山大学十五年史』）とされる。

あるいはまた、「認定講習」も昭和25年以来開講され、木造校舎の第１棟内には、これらを運営する事務室が設置され、専任の事務職員を置いた。

しかしながら、昭和30年代に入ると教員需要は安定期に入り、２年制課程が廃止されると共に、昭和34（1959）年には通信教育制度も廃止され、しばらくは認定講習も行われなくなっていった。

さらにこのころからは、学生の多くが希望する出身地である富山県や石川県での就職が困難になり始めた。殊に２年制修了生の就職が難しく、北海道などに職を求めるものも出始めた。また４年課程の卒業生でも、30年代半ばころまでは新規採用教員に僻地勤務が条件付けられ、婚期を前にした女子学生は大きな問題を抱え込むことにもなっていた。

やがて、30年代後半からは県内での就職そのものがおぼつかなくなり、かなりの学生たちが愛知県や神奈川県、川崎市などの都会地を中心とする他府県に就職先を求めるようになっていった。

次の表は、各課程別の年度別募集定員数と受験者数および入学者数を表示したものであるが、当時の教員需要に対応した動向の一端を伺うことができる。学部発足当時の昭和24（1949）年、４年課程の第１初等教育科の募集定員40名に対して、２年課程の第２中等教育科の定員は160名となっているが、昭和30（1955）年には、第１初等教育科70名に対して、第２中等教育科は100名と減少し、昭和33（1958）年の募集をもって第２初等教育科は廃止されているが、第２中等教育科はそれ以前の昭和30年をもって既に募集を停止している。また志願者数は、新制中学校の教員需要に対応してか、昭和20年代では圧倒的に中等教育科の志願者数が多かったもの

表１

年度			昭24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
4年課程	第1教育科初等	募集定員	40	40	60	60	60	60	70	70	70	70	90	90	90	90	90
		志願者数	25	92	79	96	74	108	236	306	243	219	253	234	212	320	243
		入学者数	41	40	35	30	52	44	68	65	69	66	59	44	66	60	
		編入者数(外数)	(8)	(8)	(12)	(5)	(4)	(13)	(2)	(5)	(4)	(8)	(2)				
	第1教育科中等	募集定員	60	60	60	60	60	60	65	75	75	75	75	75	75	75	75
		志願者数	145	127	229	189	206	265	472	410	261	195	232	210	234	404	387
		入学者数	57	60	45	43	46	49	70	52	57	59	40	50	54	55	
		編入者数(外数)	(4)	(7)	(7)	(3)	(9)	(2)	(2)	(5)	(7)	(3)					
2年課程	第1教育科初科	募集定員	160	160	110	110	110	120	100	100	40	20					
		志願者数	53	113	96	176	154	234	339	359	109	41					
		入学者数	113	78	91	69	74	98	78	96	32	12					
	第1教育科中科	募集定員	60	60	40	40	40	30	20								
		志願者数	105	86	108	112	92	115	84								
		入学者数	58	60	36	32	35	25	19								

が、昭和30年代に入るとこの差が接近する傾向を示すようになっていった。

2　講座制から学科目制へ

学部発足当初から昭和39年度までの間、学部の指導組織は講座制を採っていたことは先に触れた。

表２

教育学部	教育学第１講座・教育学第１講座・教育社会学講座・教育心理学第１講座・教育心理学第２講座・国語教育講座・外国語教育講座・社会科教育第１講座・社会科教育第２講座・数学教育講座・理科教育第１講座・理科教育第２講座・音楽講座・美術第１講座・美術第２講座・体育学第１講座・体育学第２講座・家政学講座・技術第１講座・技術第２講座・技術第３講座

各専攻の講座が、それぞれ師範学校、青年師範学校、文理学部などの併任教官を得て組織されたことも、前節で述べた通りである。一般的に、総合大学における教育学部の専任教官を充足することには、かなりの問題があったとされる時期であったが、まもなく各講座ともにそれぞれ専任教官が置かれ、専門教育を一貫して学部で教育できる体制が確立したのである。

また昭和40年度からは、発足当時に定められた初等教育科、中等教育科の名称が改められ、小学校教員養成課程ならびに中学校教員養成課程の課程制に変更され、講座制も学科目制に改められた。

次の表は、発足当時から昭和39年度まで、講座制を採ったころの指導スタッフの人数を一覧したものである。

表３

年度	昭25	31	35	39
教授	12(5)	13	13	13
助教授	33(18)	31	31	32
講師	12(5)	12	10	8
助手	6	5	5	5
教室技官	2	2	2	

(　):師範併任　青年師範併任　文理学部併任(内数)

3　学生の指導体制

(1) 一般教養教育

前節で述べたごとく、昭和30年代後半までは、４年制課程の学生たちの一般教養教育は蓮町の文理学部で実施され、その管理責任者は文理学部長であった。しかし、２年制課程の一般教養教育は、五福キャンパスにおいて行われ、学部教官がこれを担当し

表４　一般教養（昭和26年制定、32年改定）

人文科学系列	社会科学系列	自然科学系列	英語	ドイツ語	合計
3科目12単位	3科目12単位	3科目12単位	8単位	8単位	52単位

人文科学系列：哲学 倫理学 心理学 歴史（日本史 西洋史 東洋史）
文学 音楽 美術
社会科学系列：法学 経済学 社会学 政治学 人文地理学 統計学
自然科学系列：数学 物理学 化学 生物学 地学 統計学 生活科学 人類学
外国語　：英語８単位 ドイツ語８単位 計16単位必須
フランス語４単位 ラテン語２単位は随意履修科目
体育　：講義２単位 実技２単位のうち講義２単位と実技１単位は一般教養期間中に
音楽　：実技もあり、五福で授業が行われた。

教育心理学教室の変遷

平成元年３月退官
泉　　敏郎
（教育心理学・発達心理学）

教育心理学教室を離れて10年、手許には資料も無く、また昭和35年頃卒業した学生諸君も、最近では停年退職するこの頃でもあれば、古い話である。

① 教育心理学研究室は、発足以来、教育学教室と会議や実際の活動などで協力し合っていた。
② 他の教室に比べ、学生数も多数であった。
③ 他学部の教職の授業を多数開講した。
④ 現職教育の講師として多忙を極めた（認定講習、通信教育など）。
⑤ 発足してしばらくは、北陸の他大学の教育心理学関係の教室と、情報の交換や研究会を開催した。

教育心理学専攻の学生の活動について、特記したいことがある。それは、学生が自主的に社会のために役立ちたいと活動したこと（今のことばで言えばボランティア活動のはしりと言える）で、子供たちのために夏期休業の時期に、サマースクールを開設した。その場所は、氷見の先の海辺の小学校であったり、五箇山地域のある小学校であったりした。

活動は数年も継続した。経費はすべて学生自身の負担である。一軒の民家を借りて、食事の準備なども交代で、一週間以上も合宿したようである。プログラムも、子供たちのための学習カリキュラムを学生自身で計画・実施し、反省会を開いて改良していった。

教材費を子供たちから集めたいと聞いて、「子供たちからお金を集めることは止めた方が良い。君たちで負担したらどうか。」と助言した記憶がある。その学校からは、模造紙や画用紙などを頂いたようであるが、学生諸君も負担したようである。

海水浴の計画もあったようだが、これも止めた方が良いと助言した。

若い学生諸君の面倒を見て下さる、地方の校長先生や教職員の、格別の配慮を頂いたことは有り難いことであった。

教育心理学教室の学生諸君は、いつも教育に対する情熱に溢れていた。

認定講習。

夏休み期間、あるいは冬季に約一週間にわたる講習があり、講師として諸先生方は苦労された。県内あちこちが会場になった。今と違い、五箇山地方が会場の場合、交通も不便で道路も危険といった風であった。雪崩が起こったらと、保険に入って参加しようということを聞いたことがある。今では考えられないことである。

県外では、沖縄まで出張されたこともあった。次に述べる通信教育と共に、教育心理学教室は現職教育のために多大の功績があったと言える。

通信教育。

教育心理学教室は教育学教室と合同で、この仕事をした。テキストを郵送し、リポートを添削し、単位認定の試験をした。私は、通信教育の新聞を編集した。開講の挨拶の原稿の素案を書いたり、紙面を埋めるのに苦労した覚えがある。「今は昔」の懐かしい思い出である。

養護学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程ができるまでの間、教育心理学教室は教育学教室と協力して、学生の養護学校教員、幼稚園教員の免許取得のための教育にも努力した。

教育専攻科も、主として教育心理学教室と教育学教室によって開設され、運営された。

教育学部と附属幼稚園。

附属幼稚園は、大学の附属となる前から、長い歴史と伝統を持った立派な幼稚園であった。

教育学部の附属となってからは、歴代の学部長や園長は、幼児教育の発展のために特別の配慮を払った。今日の幼稚園教員養成課程に、附属幼稚園はすばらしい貢献をしている。　（1998.9記）

た。その後一般教養教育は、文理学部が五福に移転した昭和37年から五福キャンパスで行われるようになっていった。さらにこの一般教養教育は、「教養部」が独立してこれに当たっていくようになっていく。

昭和32年度に改定された教養教育必須単位数と開講授業一覧は、前頁の通りである。

(2) 専門教育

発足当初から昭和20年代後半にかけて、当学部の４年制課程の学生指導は、教育学部特有の教科である教職科目と音楽・美術・体育・家庭・職業については、学部教官が指導に当たることに問題はなかったが、国語・社会・理科・英語の指導は文理学部教官によって担当すべきという文部省の指導があるなど、紆余曲折があった。しかし、教員養成の目的と責任を完遂するためには、学部の発足当初から専門教育のすべての単位を教育学部で履修させることとし、昭和27年度に制定された「富山大学教育学部規

定」によって成文化し確認された。

前節の繰り返しになるが、専攻教科は、中等教育科では国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・家庭・職業・英語の10教科があり、入学試験は専攻教科別に実施された。さらに、社会科専攻には歴史・地理・法経の、理科には物理・化学・生物・地学の、それぞれの専攻コースがあり、また職業専攻には、農業を主とする第１類と、工業を主とする第２類があった。また時代の要請に伴い、まもなく他学部学生のための商業が加わった。なお職業専攻は、昭和36年度には技術専攻と改められ今日に及んでいる。

初等教育科では、国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・体育・家庭の他に、教育学・教育心理学があり、専攻教科は２年次の終わりまでに決定するものとした。学生たちの将来の就職先である小学校では、学級担任制を採り、全教科を指導することが原則であったが、その中にあっても、特に一つの専門を深く学習させることが、将来にわたる研究・教育活動の素地になると考えたからである。同様の理由で、特別研究（卒業論文）も中等教育科の学生同様に、それぞれの専攻ごとに義務づけられた。

専攻教科の履修単位数等は、前節で触れた通りである。すなわち、中等教育科では甲免許教科として、社会・理科・家庭・職業が50単位、乙免許教科として国語・数学・音楽・美術・保健体育・英語の６教科が40単位と定めた。この単位数は、「教育職員免許法」で定めるそれぞれの42単位と32単位よりも10単位多くなっているが、当時は高等学校教員に採用される者も多かったこともあり、専攻教科を十分に修得させることに配慮した卒業要件であった。

初等教育科では、すべての専攻教科の履修を中学校教諭２級普通免許状取得に関連させ、16単位の取得を義務づけたが、実際には、自由単位の履修を加えて、免許法で定める甲免の40単位、乙免の32単位以上を履修するなど、ほとんどの学生は中学校教諭１級普通免許状をも併せて取得した。

初等教育科の教科専門教育については、免許法に準拠し履修させるものとしている。すなわち、各自の専攻教科を含めて６教科以上にわたって履修し、さらに音楽・図画工作・体育の３教科については、それぞれ２単位（それぞれ演習単位として）を履修するものとした。さらに、教材研究については、８教科全部について２単位（同様演習単位として）ずつの合計16単位、時間数にして各教科60時間が必須とされた。小学校における全教科の学習指導に当たっての、基本的な素地の育成は図られたといえる。

なお、初等教育科の学生たちは、こうした中にあって、前述のように時間割の間隙をぬって、ほとんどが中学校教諭１級普通免許状取得に必要な専門の単位を取得した（教育学専攻、教育心理学専攻学生でも中学校教諭１級普通免許状が取得できた）。しかし逆に、中等教育科の学生たちが小学校教員免許状を取得するには、時間割の編成上、かなり無理があるようであった。このため中等教育科の学生たちは、主専攻以外の教科を副専攻とし、２種類の中学校教員免許状を取得して卒業する者も多かった。

学部の特性である教職教育は、教育原理４単位・教育心理４単位・道徳教育の研究２単位（それぞれ講義単位として）・教育実習（初等教育科４単位・中等教育科３単位）を基本とし、初等教育科ではそれに先の教材研究16単位を加えて、合計36～46単位が、中等教育科では、教科教育法３単位を加えた18単位が、それぞれ必修とされた。それに教科と教職との自由単位を加えた84単位が「専門教育科目」の履修単位数であり、これに一般教養（文理学部で履修する）56単位を併せた「合計140単位」の取得を最低の卒業要件とした。

教育学部では、さらに他学部の教員志望学生のために特別教職課程を置き、教員免許状取得に必要な教職専門教育のすべてを担当したが、昭和39年度現在では文理学部学生を主として、延べ2,410 名の学生がこれを履修したのであった。

4　学生の出身地の傾向と学生寮

次の表は、昭和30年代の学生の出身地別表示である。地元の富山県出身者が圧倒的に多く、次いで石川県、新潟県となっているが、他府県の出身者は全

表５　学生の出身地

	富山	新潟	石川	福井	岐阜	東京	神奈川	大阪	その他	合計
昭34年	509	10	29	4	1	3	1	2	16	575
36	410	6	20	1	1	3		2	10	453
38	384	3	29	2		5		1	7	432

体を併せても一割にも満たなかった。

この他府県出身者と、富山県下出身者でも通学の困難な学生たちのために、五福キャンパスの中に男子寮と女子寮を置いた。男子寮は正門横の、連隊本部跡の旧兵舎を改造した「思明寮」、女子寮は現在の武道場あたりに新しく建設された「紫苑寮」と命名された。当時の入寮者を出身別に見ると、富山県下では、東は魚津高校、入善高校、西は福野高校、氷見高校などの出身者が多く、石川県下では羽咋高校や七尾高校など、比較的に能登地区の出身者が多かった。

学生の寮生活の節々にあっては、寮歌「ポプラのはずれ」などが歌われ、全寮制を採ったころもあった師範学校時代のよき伝統も継承された。ただし、

技術科発足の頃

平成４年３月退官
廣　瀬　禧七郎
（技術・電気）

社会における工業化の伸展、それに伴う高校への進学率の上昇、スプートニク・ショックによる科学技術教育の見直しなどの風潮を受けて、中学校では農業主流の職業科が工学的分野に重点を置く技術科に改変されることになった。基礎的職業教育から一般技術教育への転換であった。

本学部でも、それに対応して職業科を技術科に改組することになり、農業担当の高森乙松（畜産学）、一法師頼忠（作物学）両先生と、工業担当の藤木二与（材料化学）先生によって、移行作業が進められた。「農業」の一部は「機械」に、「商業」は「電気」に、それぞれ振り変えられ、停年退官や転出によって生じた前者のポストには吉岡周明さん（昭和35年１月）と中井学さん（同年７月）が、後者には廣瀬禧七郎（昭和36年４月）が着任し、教官６名（工４、農２）、技官など教員８名（農７、工１）の構成となった。

新設の機械・電気領域のカリキュラムは、工学部の村中利吉（機械）、四谷平治（電気）、本学部の沢泉重夫（物理）ら諸先生の助言を得て作成され、各先生方には発足後も講義や実験で御協力頂くことになった。また、木工領域については、本学部の大瀧直平（美術）先生の御助力を仰いだ。

教棟は、職業科時代のもの、即ち、現教育実践研究指導センターの後方にあった煉瓦造りの平屋棟と、それに直列に接続した木造平屋棟とを一部改装して使用し、新しい技術科は昭和36年４月から開講された。

機械・電気の設備・備品類は、開設のための特別設備費の配分を受けたものの、ゼロに等しいところからの出発であり、機械の実験・実習の一部などは工学部での集中実施を余儀なくされた。そのため、当初の学生諸君には不自由をかけたが、彼等は新しい学科の学生としての誇りと夢をもって頑張り、やがて気鋭の教師として巣立っていった。なかには、卒業を１年延期して高岡の工学部に通った人や、卒業後も専攻生としてさらに学習を深めた人もあった。他方、中学校の現職の方が新設領域の研究のため、よく内地留学に見えた。

本学部では上記のように「職業科」は「技術科」と一体化したが、両者を併置した大学も多く、日本教育大学協会では「技術・職業・職業指導」部会という名称が長く続いた。本学部でも発足当初は、職業指導担当の溝上茂夫・高野兼吉、木工担当の大滝直平の諸先生が、北陸地区の部会協議などにも参加されていた。

全国協議会総会では、一般技術教育としての技術科の在り方の討論よりも、農業と工業との間での内部摩擦的議論が多かった。総会には、吉岡さんと二人でしばしば出席したが、そのような時には、本学部における高森・一法師両先生の潔い先見的対処に、敬意と感謝の念を新たにしたものである。

その高森先生は、附属中学校長に就任されたものの、一年有余にして病いに倒れられた。藤木先生の退官記念旅行は「南紀一周が良い」と決めて楽しみにしておられた矢先のことで、先生は翌昭和41年３月１日に逝かれた。学部の正面玄関でお見送りした日の記憶は、今も強く胸臆に焼き付いている。その３月末には藤木先生も停年退官となり、技術科は創設に貢献された御二人を相前後して失った。

しかし同年４月、小西照泰さん（電気）が着任され、機械系教官２名、電気系教官２名の新しい体制が始まった。１年後には現教棟に移転し、間もなく「大学紛争」という疾風怒濤の時を迎えるのである。

〔付記〕

高森先生の後には穴山彊さん（昭和44年４月、作物学）が見えて、農業系教官も２名になったが、翌年３月31日の早朝、一法師先生急死の報に接したのであった。（1998.9記）

舎監制度は学部発足後まもなく廃止され、運営は寮生の自治に委ねられた。教官の中には、当時の住宅事情もあり、それぞれの寮で寮生と共に生活された家族もあったが、学生たちの自治に介入するものではなかった。やがて、昭和30年代後半にはこの二つの寮も老朽化のために解体され、昭和39年度には寺町にある現在の寮に統合されたが、この寮も現在では老朽化しているようである。

蛇足ながら、現在経済学部前の角にあり手入れの行き届いた大きな銀木犀と、教育学部美術棟前にある楓の木は、当時は思明寮の玄関前にあったものを移植したのであり、現在でもこれを懐かしむ卒業生もいる。

第２節　研究体制

昭和30年代の教官数は教授から助手までを含めて67～60名であった。教官それぞれは、大学教官にふさわしい学識をいっそう高めることと、斯界の発展に寄与するため、それぞれが研究業績を『富山大学教育学部紀要』や、学会に発表してその成果を世に問うた。『富山大学教育学部紀要』は、昭和27（1952）年に創刊以来毎年刊行され、現在に至っている。

第３節　施設設備の整備

昭和24（1949）年４月、新制富山大学教育学部の発足当初の校舎には、旧連隊兵舎の残存する建物を充当していた。旧連隊の建物を改築して使用したものとしては、次のような施設を数え上げることができる。

明治40年代の建物ながら、師範学校以来の名称と伝統を受け継ぎ、昭和39（1964）年まで男子寮「思明寮」（定員60人）として使用されたものを始めとして、明治41（1908）年以来の建物も、昭和38（1963）年まで旧体育館・講堂や、附属小学校Ａ（図面は16頁参照－昭和29年、現在の五艘の地に附属中学校が使用していた建物を改修して移転）、附属中学校（昭和26年、現在の五艘の地に移転）、附属幼稚園の校舎としてそれぞれ使用された。さらに、明治44（1911）年の建物が附属小学校Ｂとして、また昭和46（1971）年の体育教室・合併教室は昭和38年までは体育館の代用として使用され、柔道場は大正15（1926）年の建物を移築したものであった。

戦後は、昭和22（1947）年の建物を「職業科第一・特別教室」として使用したが、ようやく昭和24（1949）年から昭和26（1951）年にかけて、教棟の新築が進められた。

すなわち、昭和24年から26年にかけて「教育第一教棟（木造）」が新築された。女子寮「紫苑寮」（定員36名）が新築されたのも、昭和24年のことである。

続いて、昭和26年には「教育第二教棟（木造）」が新築され、さらに、富山大学設置期成同盟会からの寄付によって、「家政棟」および「芸能棟」（いずれも木造。昭和42年まで使用）も完成した。

また、昭和27（1952）年には学部の「小講堂」（昭和32年移転、昭和52年まで使用）が同会より寄贈され、この年に新築された「地理地学教室」も、昭和40年代の後半まで「理学地学教棟」として存続した。

昭和27年には「職業科第二教棟」（技術科第二教棟、昭和42年まで使用）が増築された。

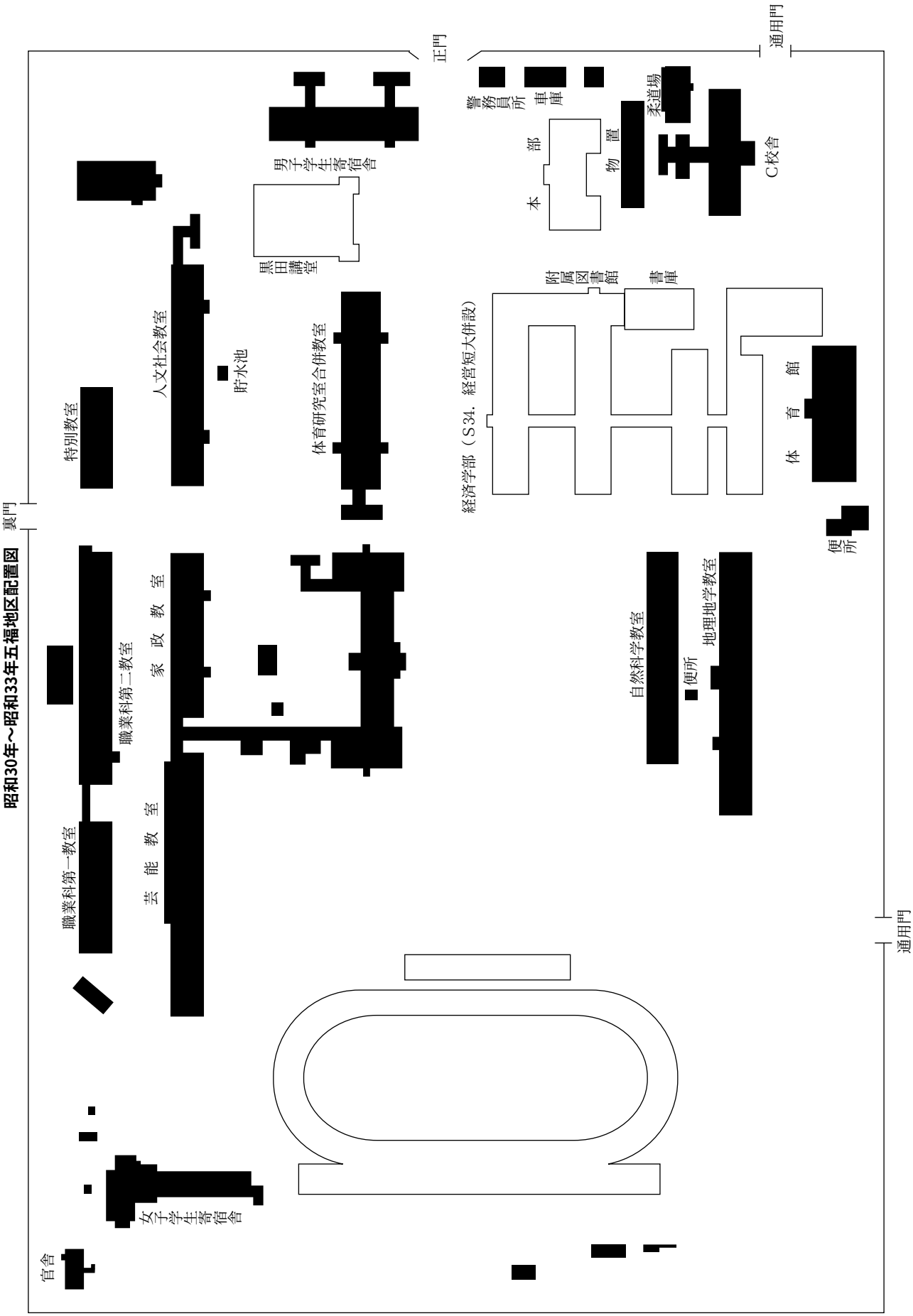
昭和29・30年および37（1962）年には「自然科学教室」（鉄筋３階建て）が順次整備されていったが、昭和43（1968）年、五福地区に移転してきた文理学部理学科と共用することとなり、「理学教棟」と称された。

昭和37年に設置された「軟式テニスコート」２面と、解体された旧体育館の跡地に新築された「第一体育館」とは、学部の管理する附属施設・建物として、当時としては清新かつ堂々たる偉容を誇ったものであった。

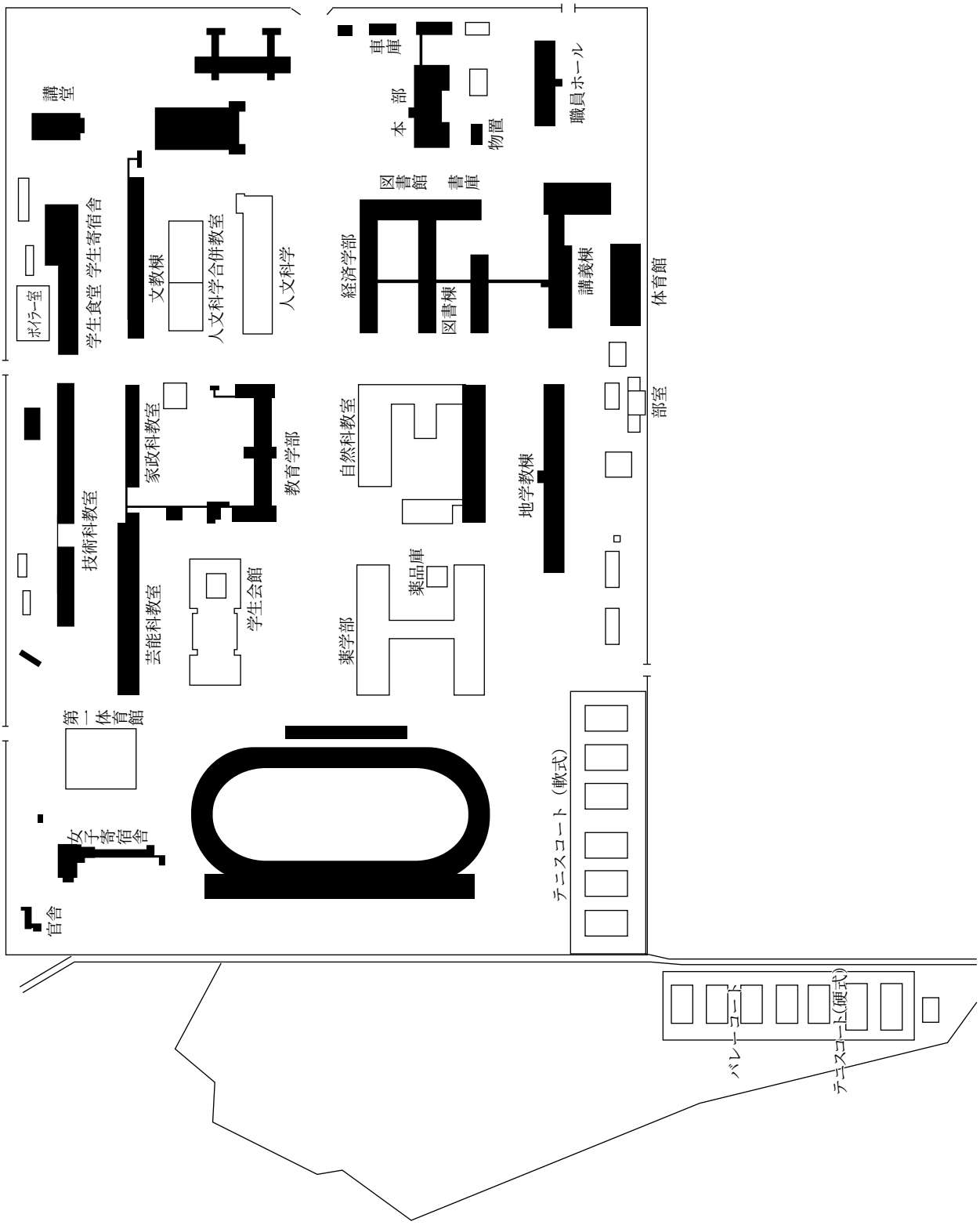
次頁に掲げた、昭和30年～33年、および昭和37年～40年に至る「五福地区配置図」によって、当時の面影の一端を偲ぶことができるであろう。

こうして、教育学部の建物もひととおり整備されてきたのであるが、上述のように旧連隊の建物の使用や建築年代も様々であり、いかにも間に合わせ的な状態であったため、やがて五福地区に集中することになり、構内に次々と新築されていく他学部等の建物や施設に比較するとき、あまりにも貧弱な様相

昭和30年～昭和33年五福地区配置図



昭和37年～昭和40年　五福地区配置図



は否定すべくもなかった。

当時の経済事情からすれば、それも已むを得ない状況であったとは推察されるが、「居は気を移す」とか「国家百年の大計は教育にあり」といった先哲のことばを引くまでもなく、国家の礎ともいうべき児童・生徒の教育にあたる「教師」の風格を育成するにふさわしい環境の、すみやかな整備が期待されたのである。

かくして昭和40年代に入り、高度経済成長の余波もあってか、昭和42年には、女子寮の跡地に「水泳プール」が設置され、同時に「教育第一棟」が完成した。続く昭和43年には、「教育第二棟（理系）」、ならびに「音楽教棟」、「美術・技術教棟」が完成している。昭和50年設置の「体育棟（教養部体育と同居）」に、昭和56年に増築された五階建を加え、「教育第三教棟」が、昭和58年には「教育実践研究指導センター」が、それぞれその時代に見合った施設として整備されていくのであるが、その細部はそれぞれの節に譲りたい。

第４節　学生生活の実態

１　学業生活

(1) 蓮町での一般教養時代

蓮町での一般教養時代は、語学の授業のみは学部学生を分割し、小クラス編成で授業が行われたが、他のほとんどの授業は、講堂や俗にお寺と呼ばれた大教室で、他学部の学生たちと一緒に受講した。そのために学部を越えた交友関係や、サークル活動がより促進された。当時フォークダンスが大流行で、大学祭も近づくと連日のようにグラウンドでフォークダンスが行われたが、その指導者の多くは教育学部学生だった。

一般教養の音楽では音楽実技の授業もあり、これは五福のキャンパスで授業が行われた。この授業は音楽専攻生の他に、一般学生対象の授業としても開講された。

一般教養の体育としては、別に氷見市女良村の中田海岸にあるお寺で合宿し（後には中波海岸のお寺になった）１週間にわたる臨海実習が行われた。これは、初等教育科学生には全員参加が義務づけられた。道路網の整備されていなかった当時、女良村へは氷見漁港から出る木造船の「灘丸」に乗るなど、富山からは１日がかりであった。実習の最終日には沿岸沿いに、手漕ぎの伝馬船を護衛として、各班ごとにおよそ６キロの遠泳を実施した。

この教養体育としての臨海実習は昭和40年代後半まで実施され、それ以後は一時能登の中島町の室内プールでも実施された。しかし教官旅費などの問題もあつて、大学のプールと西部中学校および附属学校のプールの３カ所に別れて、１年次学生対象に「教材研究水泳」として実施されるようになった。現在では、大学プールと附属学校プールの２カ所で実施され今日に及んでいる。

(2) 五福での専門教育時代

２年次後期から、学生たちは蓮町の文理学部の校舎から兵舎跡を校舎とする五福のキャンパスに移行し、専門課程の授業を受講した。今から思うと大変な校舎での授業であったが、学生たちはそれなりの新鮮さと緊張感をもって専門の授業に臨んだ。ことに理科棟、芸術棟、家庭科棟、職業棟などでは夜を徹しての実験などが熱心に行われた。

また、夏休みには社会科や理科専攻学生たちの巡検と称する研修旅行や、職業専攻学生たちによる工場見学や農場見学を中心とする研修旅行が実施された。

音楽専攻学生たちは合宿による器楽合奏法と合唱法の授業が実施され、その後県下の学校への演奏旅行が行われた。また、毎年名古屋で行われる合唱コンクールへの参加も年中行事の一つであった。

保健体育専攻の学生たちは夏の臨海実習と、それに続く登山実習、冬の志賀高原でのスキー実習、春の立山登山実習などが実施された。

教職を専攻する学生たちは、氷見の女良小学校で、夏休み中の子どもたちを集めて夏季学校を開設した。

それぞれの専攻ごとに実施されたこれらのイベントは、専門的基盤を高めるためにも大切な体験学習の場となったが、学生たちにとってみれば、青春時代を謳歌する場でもあったのである。

(3) 教育実習

教育実習は、第１中等教育科の教育実習として、附属中学校で２単位分の実習、協力中学校で１単位分の実習が行われた。また一時選択で、富山中部高校を中心とする高等学校の教育実習も実施された。

第１初等教育科の学生は附属小学校で、多人数の第２初等教育科の学生は、かつての女子師範学校の代用附属であった富山市立堀川小学校で、それぞれ実施された。

２年制が廃止されてからは、４年制の初等教育科学生たちは、３年次と４年次の２カ年にわけて２単位分ずつ、附属小学校と堀川小学校の両校で実習が行われるようになった。

2　学業外の生活

(1) 事務組織と学生の厚生補導について

学生部に補導課と厚生課を置き、補導課には教務係と補導係を置いた。厚生課には厚生係と保健係を置いた。

これらのうち、直接学生生活の充実に直接関連する厚生係の業務内容は、昭和32（1957）年に改定された規定（『富山大学事務分掌内規』昭和61年５月制定）の「第22条」に以下のように示されている。

１、寄宿寮並びに宿所に関すること
２、学生のアルバイトに関すること
３、学用品その他物資斡旋配給に関すること
４、学生の福利増進に関すること
５、学生の奨学に関すること
６、卒業生の就職斡旋に関すること
７、学生の証明に関すること
８、学生の生活調査に関すること
９、消費組合に関すること

さらに、学生の厚生補導に関しては、補導協議会、文化部会、体育部会、学生補導委員会（現在の学生生活委員会）、学部職業補導委員会、授業料減免選考委員会などが置かれた。

(2) 学生生活

教育学部学生のアルバイトは、家庭教師が圧倒的に多かった。昭和30（1955）年初期に教員の初任給が１万円にも満たないころに、週２～３回の家庭教師で月2,000円程度の収入になるようだった。

免許状取得のために、学部の授業が過密になりがちだった学生たちの全学サークル活動への参加は、専門教育を履修するころになれば、ややもすると消極的にならざるを得なかった。

学生たちの普段の服装は男子は学生服であり、昭和30年代には卒業式においても学生服を着用するのが普通だった。当時、東京近辺の私立大学キャンパスでＧパンを着用する学生姿が物議をかもしたが、当学部でも２、３の学生が着用する姿が見受けられた。大学紛争などを境に、学生生活も一変するが、それは昭和40年代のこととなる。

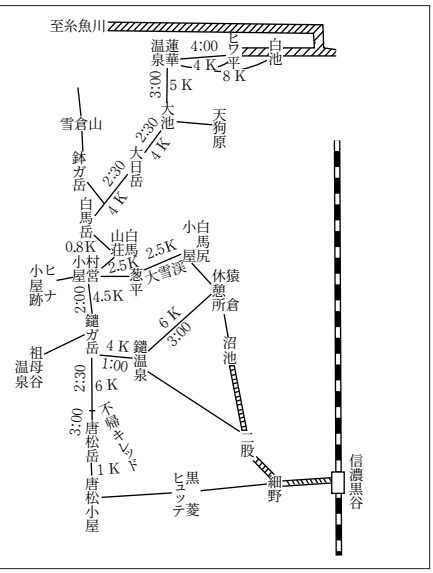
登山日記　白馬方面　登山

昭和33年８月16～22日

〈メンバー〉

リーダー	稲　川　美代子	(3)
会計係	田　村　京　子	(4)
炊事係	金　瀬　百合子	(3)
	田　中　たづ子	(3)
テント係	竹　内　良　子	(4)
	松　永　幸　子	(2)
衛生係	宮　井　節　子	(2)
レクリエーション係	島　田　綏　子	(2)
連絡係	田　村　京　子	
燃料係	森　田　春　枝	(2)
	小　川　敏　子	(2)

白馬の地図



８月16日

コース　富山－平岩－ヒワ平－蓮華温泉

〈９時43分〉富山発の直江津行に乗る。

天気晴朗にして風爽やかなり、車窓に立山連峰を望む。

〈11時45分〉糸魚川着。

大糸線に乗換え、時間は２・３分しかなかった。両側を山と山に狭まれて姫川に沿って奥へ入る。

空は白く小雨が降ったりやんだりしている。皆んな元気で、車中どこからか「山登り今日はどこまでいったやら」という迷句が聞こえて微笑を誘う。

〈12時55分〉平岩着。

ヒワ平行のバスまで30分の待ち合わせ。バスに荷物を積む時、車掌さんが、「女の人でこんなに重い荷物を背負って登る人は初めてだ」と驚いている。

〈13時35分〉バス発車。

三国境に源を持つという大所川が右に流れている。相変わらず霧のような小雨が降っているが、そんなもの吹き飛ばせといわんばっかりに雪山讃歌の軽やかな合唱！停留所「大所」付近は全くすばらしい景観である。巨大な岩と岩の間を縫うように青い水が流れている。

14時頃、小雨はやんだが山々は霧にかくれて姿を見せない。木地屋部落を少し過ぎたところで、60という白い札をつけた杉の木が見えた。これは蓮華温泉から平岩までのツアーコースの目印だという。

14時30分、杉の平停留所を過ぎた頃からバスは急ピッチに高度を高めて行く。車窓はただ乳色の空間が占めているだけだが晴れていると、朝日岳や雪倉岳が見えるという。「標高千米」と隣の老人が教えてくれた時、右手のガスの中に白池がかすかに見えた。この辺はもう高山植物のヤナギランや御山人参草、大カンゾ草などが車窓を賑わしてくれる。

〈15時〉ヒワ平着。

小さな駅でもあるのかと思っていたら荷物を置く台さえない所であった。山の陰へ出張して用を足し、いよいよ荷をかつぐ。それぞれ勢（ママ）いっぱいの重さである。７貫から８貫、例えば筆者などは14貫の体重で８貫の荷だから、一度、キスリングの上に転がってから人に起してもらう始末である。

〈15時30分〉ヒワ平出発。

田中教官、稲川、高田、島田、宮井、田村、松永、金瀬、森田、小川、竹内、頭川教官、林さんの順に出発。

道はすぐに急な坂になっているので慣れるまですごい息切れがする。径がぬれているので滑りそうになる。一歩一歩踏みしめて前の人の足跡をたどって行く。

16時５分小林、「アーツラカッタ、もうだめかと思った」これが互に慰め合う言葉である。十分休んで千歩程歩いたら谷の向側からうぐいすが二声・三声「ヨーキタナ」と歓迎してくれた。下ばかり見て歩いているから景色など少しもわからない。田中先生の携帯用ラジオで魚津対徳島の中継を聞きながら歩く。「ボール」とか、「ストライク」と声高に知らせて下さる先生の声に、一喜一憂しながら今はもう無意識で足を運んでいる。道は細くて泥だらけであるが、こんな道にも慣れてしまえば、「こんなどろんこの道だとスキーで滑った方が早いね」「フ・フ・泥スキーか」「あんた、まるでフラダンスみたいな歩き方ね」といった冗談も飛ぶ。時々、田中先生の声が思い出したように「バッタ打ちました。大きな当り！」と告げる。皆んなの足に力が入る。

ヤツ木一平という立札があった。後の方で「ワァ・ア・ア・アー」と奇声を発すれば前の者がつられたように「ヤッホー」と切ない声を出す。ガスが白く蔽うていて、何も見えない。

・ヤッホーと声の限りに山を呼べど山彦も来ぬガスの白さよ。（筆者詠）

歩き出してから二時間余りになるから皆んな喉がかわいてきた。折しも通る丸木橋、何と美しい水だろう。「アー、飲みたいね」しかし、水を飲むとテキ面に息切れがして歩けないというので水は禁物。許可がなくては飲めない。

18時40分、弥兵ェ川を渡ったところで小休。水を少しだけ飲んでもよいという許可あり！

「さあ、もう少しだ。ガンバロウ！」元気はでたが、水を飲んだので身体が言うことをきかない。互に「一・二、一・二」と掛声をかけて最後の坂を登った。

〈19時30分〉蓮華温泉着。

ドッカリと荷物を置いてリーダーと会計はキャンプ地の交渉に行く。キャンプ代、一人40円。

風呂に入ってくつろいだ人々の声がランプの光と共に外へ流れてくる。「早く、湯につかりたいなー」でも、これからテントを張らねばならない。真暗だから電池片手にフラつく足を踏ん張って、「今夜は雨が降らないから、少したるんでいても堪忍してやる」という声に励まされながら設営、炊事係は、炊事場があったので助かった。今夜の献立は、食パンとハムとミルクである。熱いミルクが腹わたに泌み入るようだ。

田中先生から炊事係の数が多いこと（６人を４人にする）と食糧分配の不手際（人数分だけ容器に盛ってから、皆んなを呼ぶように）について注意があった。

食後、温泉で疲れを流し、９時頃就寝。

８時17日

コース　蓮華－天狗の庭－大池

〈６時〉炊事班起床。

「ウワー、素晴しい天気だ」歯をみがきながらふと見ると、朝日岳が山ひだに雪を残して空いっぱいにそびえている。爽やかな朝食をすませて後始末。初めての朝だから何もうまくいかない。

〈10時〉蓮華温泉出発。

昨日にも増して急な坂道。文字通り、“陽のあたらぬ坂道”なので、泥だらけで少し油断すると滑ってしまう。休憩になると、ところかまわず転がって寝てしまう。そのうちに昨夜、眠むれなかった一人が、とうとう顎を出してしまって、林さんの健闘である。他の二・三人も「私達だけ後からゆっくりきます。皆んな先に行って下さい」とかなんとか弱音を吐き出した。

栂の森、天狗坂と難行につぐ難行であった。

〈○○○○〉天狗の庭着。

ここで昼食を取っている間に、ガスが湧いてきて寒くなってきた。雨具を用意して出発。途中から雨が降り出して車軸を流すが如し、元気のあるものは足の弱いものを待っていることが出来なくてどんどんピッチを上げ、隊が二つに途切れてしまった。

〈○○○○〉大池着。

前の人の足が止まったので顔を上げると「ウワー、お花畠！」ガスにとざされながら細い道をただ機械的に歩いてきたので平坦な場所にきた喜びはひとしおである。

先についた二・三人は、まきを拾いにもどってくれた。雨はやんだが、温度がとても下っているのでヤッケを着る。今日は昨夜と違って温泉も炊事場もない。炊事班はカマドを作り、設営は風が強いのでリュックにいっぱい石を拾ってきて、テントの内側や荷物シートの上に並べた。たちまち日が落ちて食事は、懐中電燈の下でやる。

食後、紅茶にウイスキーを入れたのを飲んで暖を取る。

明日の天気を気づかいながらシラフに入る。

８月18日

快晴、大池の碧が昨日より一層美しい。今朝は荷作りも大部（ママ）早くできた。

コース　大池－白馬頂上－頂上ホテル

〈８時10分〉出発。

群れ咲くヒオウギアヤメに別れを告げて又、上りの連続。それでも今日は天気が良いから時々、山を眺めて元気をつける事ができるのであまり疲れを感じない。大池がキラキラ太陽に輝いてだんだん低くなって行く。９時40分頃、左に焼岳、右に雪倉、朝日が見える。途中で派手なチェックのシャツを着た男性とワンピースを着た女性に出会う。一度に荷が重くなったような気がする。「来年は私も彼氏とくるわ」と溜息しきり、やはり年頃ですな。

それでも雪渓のそばで休憩したら、ビニールの風呂敷を敷いて滑って遊ぶ可愛娘達でもある。

10時頃、尾根づたいなので雲海が下の方に見える。その切れ目に糸魚川辺であろうか町の屋根瓦がキラキラ光っている。どんどんのぼって行くと粘土と緑がしまになった山があってみんなの目を引いた。頭川先生が「虎岳」と迷名、岩だらけの道を通って11時５分大日到着。

リュックを置いて水の近きまで下って昼食をとる。谷川の水で作ったジュースの味は天下一品！

〈13時20分〉出発。

ジュースに酔って足が思うように動かぬものあり、それでも所々平坦な尾根に出るから割合楽だ。

〈14時42分30秒〉白馬岳頂上着。

とても風が強い。西側はゆるい傾斜だが東側は絶壁である。誰れかが絶壁の下の方で、虹が出ているのをみつけた。絶壁からのぞくとちょうど虹の真上なので、半円形でなく完全な円になっている。のぞいている自分の影がその中に映っている。

方向板の所で全員記念撮影をした。立山の頂は白い雲がかくしていたが、やはりなつかしい。何かしら「自分の山があそこにある」といった感じである。

・大いなる青空占むる立山と剣岳見て心安らぐ。

とても寒いので、20分の予定を切り上げてすぐに下りにかかる。

〈14時57分21秒〉記念すべき瞬間！

白馬頂上より下がること20米位の所で、折からの突風が田中先生のチロルハットを奪って断涯の下へ「まだ、新しかったのに…」泣きべそはかかなかったが、

〈15時30分〉全員ロックロールを踊りながら下る。村営小屋着。

下から登ってくる、か弱き男性共は「オイ、あれみんな女の子だぜ、恥ずかしくないのか。ガンバレ」「チェッ、すごい荷物かついでやがるな」とボヤクことしきり、村営小屋のキャンプ場は狭いガラ場で、ほとんど田中先生、頭川先生、林さんの助力でテントを張る。

やはり、女性は女である。

〈17時30分〉夕食。

だんだん寒くなってきた。

19時頃、テントの中に落ちつく。頭川先生のテントはレクリエーション係が音頭を取って楽しく合唱。

田中先生のテントは「スポーツはすべて相対的

なものが多いが山と海におけるスポーツは、絶対が相手である。死に直面した時、人間は……」と名講義を拝聴する。

８月19日

村営小屋キャンプ場に沈殿。

昨夜より、突風を伴う大雨がテントを襲っている。昨日は天候に恵まれてやっと山にきたような気分がするとよろこんでいたのに－。今日は、２坪足らずの黄色い布の中に沈殿である。みんな羽根だらけになって、頭は蜂の巣の如し、「黒い瞳の若者が、ワタシノココロヲ　トリコニシーター」などと歌う柄ではない。朝食は、クラッカーとジュースとバター、何もせずに寝ていても消化器は働いているらしい。

昼食は、温いものがほしいというので、炊事係の奮闘によりミルクがあたる。石で作ったカマドの中へ液体燃料を入れてやっとわかした尊いものである。

午後、少し晴れてきたので４時頃、炊事班を残した７・８人は足ならしに行く。30分位下る黄色いウサギギクやミヤマキンバイ、岩キキョウなどの群れ咲くお花畠にきた。休憩代20円也の「お花畠休憩所」で１パイ40円のミルクを飲み、大小の雪渓を背景にして記念撮影をして山の味を満喫した。

〈18時〉夕食。

卵の入ったおかゆをすすった。ポツポツ雨が降ってきたが、明日は大雪渓を下りて木崎湖へ行くという予定を聞いて大喜びである。

もう、一時も早く山を下りたくてしょうがない気持ちである。

８月20日

コース　村営小屋－大雪渓－猿倉－木崎湖

やはり思わしくない天気だ。ガスがかかっていて、時々小雨が降る。

〈10時35分〉雨具を着て出発。

間もなく大雪渓に着く。雨は降らないがガスがかかったり晴れたりしている。

※「落石！」と上の方でいっても、顔を下げないこと。（顔に石があたって、けがをする）

※青氷の上にのぼらないこと（滑る）

※急がずゆっくり降りること。

と注意を受けて慎重に下る。

・落石に死ぬこともありと聞きながら
父母を思いつつ雪渓を下る
（これでも短歌ですぞ）

〈13時15分〉大雪渓を下り終えて小休。

リンゴと羊かんを食べる。Ｍさん気分が悪くなる。

〈15時45分〉猿倉着。バス

バス待ち合わせ。

〈16時20分〉大町行バス発車。

Ｍさんが発熱する恐れがあるので、平中学に一夜の宿を借りる。裁縫室の畳の上に坐り久し振りに固い御飯を食べる。お菜は、炊事班苦心の野菜サラダでとてもおいしかった。

Ｍさんが高山病らしい、でも夜中に発熱すると困るので、４人が寝ずの番をする。Ｍさんは何ともなかったが、元気だったＳさんが、夜半から嘔吐して苦しみ出した。食べすぎだと本人はいうが、昨日から御飯らしい御飯を食べていなかったのに急に、沢山食べたからだろう。

８月21日

朝になって見ると、半数以上が下痢である。しかし、中学校は授業があるというので、とにかく木崎湖畔にテントを張ることにして学校を出る。

高山病のＭさんと嘔吐に苦しんだＳさんと下痢の激しいＴさんは、保養所で一晩泊ることになる。後のものは、木崎湖畔で自分達だけでテントを張り、カマドを作れ、というきついお達しである。

キャンプ地は砂地で、ピークをさしてもこたえがなく、面喰らってしまった。結局、平らな所はあきらめて木の根を利用して、松の木の間にテントを張る。炊事もうまくいったが、夕方頃からＨさんが原因不明（多分過労）の高熱を出して９時頃には、とうとうテントの中へ医者を迎えることになった。

途中まで医者を迎えに行って、林の中を案内してきたが、筆者よりも、医者の方が地理にくわしくて上手に近道を通って行くのには驚いた。解熱剤を打ったからあとはどんどん冷やして下さい。という指示なので氷水屋から氷を買ってきて、又、三人が不寝番である。

８月22日

コース　木崎湖－平岩（姫川温泉）－富山

今日は、第３日目に負けないくらいの上天気、Ｈさんはすっかり良くなって、ボートを漕げる程になった。

〈○○○○〉大糸線に乗って平岩で途中下車。

姫川温泉で垢を落とすことになったが、あまり立派な旅館なので玄関で立往生した。でも、山帰りの客には慣れているらしく、どんどん荷物を奥へ引張り込んでくれた。お茶を一パイ飲んで湯につかると、しみじみと山が恋しくなってきた。

・山の汗を湯に流す時、しみじみと
山の空気が恋しくなりぬ

〈19時50分〉富山着。

８月23日

反省会

リーダー　挨拶。炊事係から順に反省して下さい。

炊事係　調味料が多かった。非常食のクラッカーや

簡易食の餅が沢山余った。おなかをこわした人が沢山居たので。
問　非常食何日分？
係　１日分です。
田中教官　男子の専攻生は餅は全部食べてきた。
　女子の方で餅があまったのは、餡子のせいじゃないか。
田村　餅が簡易食の役目を果たさなかったということは今後気をつけねばならない。
金瀬　おなかをこわす前も、みんな食欲が進まずお米も残った。
宮井　餅よりクラッカーの方が良い。
竹内　甘いものが多過ぎたのではないか。
田中教官　甘いものはかえって少なかった位だ。
島田　塩辛いものがほしかった。
田中教官　去年より荷は重かったが、そのかわり歩き方はおそくした。今年はあまりにも主食以外のものを食べすぎたのだ。もちやクラッカーなど食べ慣れぬものが多い。
　去年は御飯が主で米は足らなかった位だ。又、全体がまとまっていた。
田村　食事の量を研究しなければいけない。
田中教官　炊事班長がその日その日の疲れ具合を見てどの位食べさせるかを定める。おいしいから食べるのではなく、歩くために食べるのである。山は食べ過ぎに失敗する。間食が多い。
　米以外のものは非常食だけにする。
稲川　次に設営。
竹内　テントは一応点検していったのに、ひもがきれていて困った。テント係は４人ずつにきめるべきだった。
林　テントの張り方を知らぬものもいた。
田中教官　去年は泣く程、張り直しをさせたが、今年は一度もはりなおしをさせなかった。
田村　テントを張る場所を自分達だけできめたのは、木崎だけでした。砂地で困った。
田中教官　白馬の村営小屋の所はガラ場だった。
稲川　テントの張りづなをゆるめることの勉強が必要だ。
田中教官　テントが良いからその必要があまりなかった。
林　キャンプ地に着いてから自分の荷ばかりにかかり果てていた。
田村　テント係が指図すべきじゃないか。
田中教官　それは隊長の仕事だ。隊長からへばってしまっては困る。
林　隊長に対して理屈を云いすぎる。隊長のことばに服従すべきだ。
竹内　皆んな感情がとがっているからやさしい言葉でものを云ったらどうか。
田中教官　今年の隊長は言葉使いがやさし過ぎた。もっと強く云うべき。
高田　隊長としての言葉づかいがある。感情を入れずにきっぱり云ってほしかった。
松永　感情的だった。
稲川　私が一言いうと、一つ一つ非難されるので困った。
田中教官　たてつくのは、上級生より下級生に多い。よく理屈を云う、何もかもリーダーのいう通りにすべきだ。自分のことよりも共同のことを第一にすべきだ。炊事は炊事にかかりきりだったが、これはよかった。リユックの中へ入れる順をよく考えて置く。
頭川教官　荷物の仕末の時、全部リュックのまわりに持ってきて入れる。
稲川　次に衛生係。
田中　親切だった。
宮井　下痢止の薬が足らなかった。
林　薬の箱を点検しておかなくてはいけない。
頭川　管理の面はどうだったか。
宮井　うまくいったと思う。
稲川　紙に使用法を書いておいたのはよかった。
田中教官　かんじんの衛生係がくたばったが紙に書いてあって助かった。
林　仁丹は共同で持って行くべきだ。
頭川　一番使った薬は何か。
宮井　ダン、ムルチン（風邪薬）
田中教官　マヨネーズはあまりよくない。
　食欲の出るような料理が必要。トマトを持っていけばよかった。
頭川教官　去年は持っていった。
田中教官　去年はキューリを先に食べてしまって青いものに欠乏した。
稲川　リクリエーション係
島田　間食の係とリクリエーションの係は別にしてほしい。
田村　時間にづれがあるから一人でも良いと思う。
田中教官　リクリエーション係は、リーダーに相談して歌を歌わせればよい。自分が下手なら上手なものに指名すればよい。
島田　間食の計画が不充分だった。
田中教官　いつ何を出すか考えて、自分の好みと人の好みをよく考える。
田村　二つテントがある時は、リクリエーション係はどうすればよいか。
頭川教官　かけあいをしたりすればよい。
田中教官　プリントにする歌の選択に研究の余地あり。
稲川　次に燃料係。
森田　あまり液体燃料を大事にしすぎて沢山残った。
田中教官　山の原則は携行燃料である。

森田　石油の栓がなくなって困った。
下級生　（隊長の反省を求める）
稲川　隊長はビシビシ云える人でなくてはだめだと思った。
田中教官　間違っても良い。なおしてもらえばよいのだから、去年は隊長とみんながけんかした程だ。
　隊長としては１日の中にいつ、先生と連絡するか、その時間を作るべき、翌日のことは前日の夕食にいうように、隊長は孤独になるものだ。隊長ほどつまらぬものはない。
田中　リーダーはどこを歩けば良いか。
田中教官　一番先を歩き、弱いものを基準にする。
　大池へつく前の隊列が一番悪かった。隊形がバラバラになっていた。強いものが弱い者を精神的にでも引張って行くべきだ。あの時は、隊長がへばっていたのだから問題にならない。
田村　副リーダーをはっきりきめて置くべきだ。
宮井　大池へついた時、先についてまき拾いをしたが、だれかかわってほしかった。
田中教官　まきは二人に拾わせておくように云ってあった。
林　歩く順番は隊長がきめた通りにしてかえてはいけない。
稲川　初日から計画がくずれたが、今になってからハーンと気づくことが多分にあるが、今後の参考にはなるだろう。特にリーダーがバテたことは申し訳けない。
田中教官　30分歩いて15分休んだが、普通は30分に５分の休憩で良い。
　山は単純であるが、植物を見たり山を見たりしておもしろさを感じるようにする。
　海の場合も山の場合も、気を許してはいけない。絶対が相手だから自分が生きていることを痛切に感じる。人間は感情の動物だというが山では意志の力がものをいう。
　山は海よりも冷めたく、冷酷なものだ。

（以上）

〈会　計　報　告〉

収　入　高		
費　用	2,000円×11人	22,000
（先生）	1,000円×２人	2,000
米売却（姫川温泉にて）		700
合　　計		24,700

（『富大体研三十年のあゆみ―厳しさに堪え師弟の絆強く―』昭58.8）

昭和33年　水泳実習日誌

７月28日　晴
10時半　中波浄光寺到着、整理
１時　設営、水泳テスト
５時　テスト終了
６時　夕食
７時　学科－水泳実習の目的
９時　消燈
備考
・11時－白岩住職の挨拶
７月29日　晴
６時　起床
６時半　体操、清掃、配膳（２・３班）
７時半　朝食、テスト結果発表（田中先生）
８時半　１・２・３・４班　教材研究、専攻班、蛇ヶ島遠泳
■教材研究－有沢先生
１．泳げないものを泳げる様にする方法
２．泳げるものを更に泳げる様にする方法
1. 水中並びっこ、水かけっこ、水中じゃんけん遊び
2. バタ足競泳、立泳～潜行～浮身、飛込み
３．泳法…（バタ足）速泳、手泳、背泳、横泳、立泳、クロール、飛込み
12時　昼食～午睡
■２時半～
◎水泳実習（各班別）、蛇ヶ島遠泳（専攻班）午前続きで２時半到着、３時半～　中だ海岸で水泳実習
５時～　各班、専攻班実習終了
５時半　配膳
６時～　夕食
７時20分　学科－水泳指導法
９時　消燈
７月30日　晴
６時～　起床
６時半　体操、清掃
７時　配膳（４・５班）
７時半　朝食
８時半　水泳実習、１・２・３班－各種目実習、４班－仏島遠泳、ボート、専攻班－９時中田海岸集合して蛇ヶ島で６時帰着
12時20分　１・２・３・４班は終了
12時40分　昼食
１時～２時20分～午睡
２時40分～１・２・３・４班－水泳実習（各種目）
５時　実習終了
６時　配膳
６時半～夕食

７時20分～学科－水泳の衛生管理（田渕）－
８時半～学科終了
９時～　終了

７月31日　晴
６時　　起床
６時半　体操、清掃
７時　　配膳（６・７班）
７時半　朝食
８時～合唱練習
８時40分　実習出発
９時～　専攻班、４班仏島遠泳、３班ボートで仏島、１・２班～クロール・手泳・背泳練習
12時半　昼食
２時～　中休み
２時半　水泳実習
５時半　終了
６時　　配膳
６時半　夕食
７時半　学科－救助法・有沢先生－
８時40分　終了
９時　消燈

備考
・有沢先生の救助法は実技
・２日に行われるレクリエーションにおいて、各班何をするか考えて居く事、（娯楽係）
・好天気が続いて水不足のため不便を感ずる。
・明日１日は４・３班蛇ヶ島へ遠泳。２・１班はボートで行く予定。

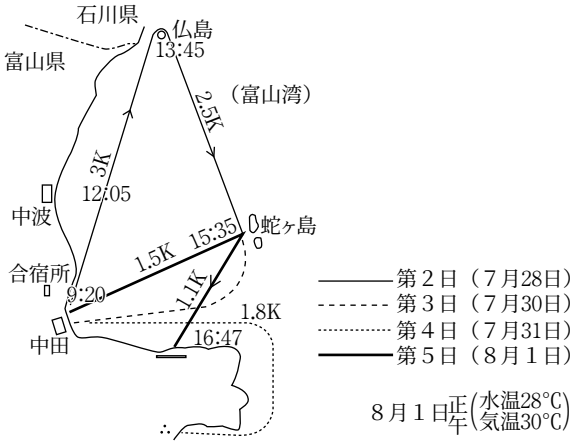
８月１日　くもり後晴
６時　　起床
６時半　体操、清掃
７時　　配膳（８・９班）
７時班　朝食
８時50分　実習出発－１・２・３・４班各種目練習、専攻班蛇ヶ島遠泳
12時10分　終了
12時半　昼食
１時～２時半　午睡
２時40分　実習出発　１・２・３・４班－泳法練習、専攻班は午前の実習引続きで
５時　　終了
５時半　配膳
７時　　夕食
８時～　学科“水泳管理”
９時　　消燈
・高潮のため蛇ヶ島行きはとり止めて、翌、２日に延びて各班砂浜沿いで練習
水泳実習

午前
出席者　21名
見学者　１名
欠席者　合地亮文　理由腹痛、橋本悦子　理由腹痛、有沢昌子　理由下痢

午後
出席者　21名
欠席者　３名、橋本悦子　理由腹痛、吉田和子　理由下痢、米沢敦子　理由風邪
帰省者　中井学　理由不明

８月２日　雨後晴
６時　　起床
６時半　ラジオ体操、清掃、配膳（10・11班）
７時半　朝食
10時　　専攻・４・３班中田海岸より蛇ヶ島遠泳
11時　　１・２班ボートで蛇ヶ島へ
２時　　蛇ヶ島にて昼食
４時50分　有沢先生－救助法の実技－
５時半　蛇ヶ島より１・２・３・４・専攻班
７時40分　姿海岸へ遠泳。１・２班のうちより数人も３・４班の援助により姿海岸へ無事遠泳終了
７時50分～姿海岸より徒歩にて中波浄土寺へ
８寺20分　到着～夕食を取る（到着順に）
10時～　“娯楽大会”－審査員－住職、田中、頭川、山渕教官
12時20分　終了～消燈

1963年　水泳実習記録



◎娯楽大会結果発表（50点満点）
１等－賞品　サイダー（11本）
９班“二人の運命”－44.4
２等－ミルクコーヒー
１班－40.2、11班－39.7
３等－ジュース
２班－36.5（ママ）、10班－39、３班－38.9

実習午前
　出席者　18名
　見学者　４名…鎌仲寿子、藤沢博子、荒木不二子、
　　中平浩子…風邪
　欠席者　１名…室城淳子…風邪
午後
　出席者　22名
　見学者　ナシ
　欠席者　１名…室城淳子…風邪
　帰省者　１名…中井学
８月３日　晴
　６時　　起床
　６時半　体操、清掃
　７時　　配膳（１班）
　７時半　朝食
　８時～９時　第２調査を行う。
　９時～　水泳テスト、内務班別にテストを行う。
　12時　　終了
　12時半　昼食
　１時～　“臨海実習反省会”
　１時50分　清掃
　２時50分　全員集合
　３時　　―バス到着――路富山方面へ

		午　前		午　後	
第一日	７月28日	富山駅		合宿所づくり 個別水泳練習	実習生活、オリエンテーション 10時就寝
第二日	29日	6時起床 9:20 中田→蛇ヶ島	休憩 中食	蛇ヶ島→姿	水泳医事 10時就寝
第三日	30日	6時起床 9:15 中田→蛇ヶ島	救助法 中食 実習	蛇ヶ島→姿	水泳医事 10時就寝
第四日	31日	6時起床 中田→大境			遠泳用炊事 および準備
第五日	８月１日	5時起床 中田→中波	→ 仏ヶ島 →	蛇ヶ島→姿	休　憩 9:30分就寝
第六日	２日	6時起床 中田にて 飛込み練習		個別水泳練習	反省会 10時就寝
第七日	３日	帰富準備、 清掃		帰富	

（『富大体研三十年のあゆみ』同前）